【郷土史への扉】

天の逆鉾由来考 ～前編～

幕末の志士、坂本龍馬は妻のお龍と慶応二（一八六六）年に鹿児島を訪れ、高千穂登山をしました。

龍馬が姉の乙女様に出した手紙には高千穂の絵図が描かれ、山頂の「天の逆鉾」の絵図まで添えてあります。

龍馬の絵図と近ごろの逆鉾の写真と見比べると、今の逆鉾は、龍馬の描いた鉾の上部に三本の剣のような物をくっつけた形になっています。

ええ何で？　こう疑問を感じ始めてから、古い時代の逆鉾の状態などを知りたくなり、調べてみました。

実は、龍馬たちより三十年前に高千穂に登り、山や逆鉾の絵図を残した伊東凌舎という江戸の講談師がいるのです。凌舎は参勤交代を終えて帰国する島津斉興にお供して、薩摩に入り、天保六（一八三五）年から七年まで領内を回りました。彼はその時に見聞きしたことをまとめ、『鹿児島ぶり』という紀行文にして残しています。

天保七年七月二十六日、高千穂登山。「いちごの実にて、カツを凌ぎつゝ、上り見れば、兼て聞及、天の逆鉾有。鉾は実に神代の器なりと云も、左も可有なり」と感想をつづっています。

もう一人、橘南谿という京都の医者が高千穂に登っています。天明二（一七八二）年十一月で、凌舎よりさらに五十年くらい前のことです。この時の紀行文が、『西遊記』として有名です。

南谿は登山の動機を次のように書いています。「予、久敷、此の逆鉾の事、聞居てゆかしく思い居つれば、鹿児島逗留の時節、志を起して登らんとす」

これより察するところ、早い時代から、神代の珍品とされる「天の逆鉾」の名は藩外にも聞こえていたのでしょう。この「天の逆鉾」を一度見てみたいという願望が、江戸時代には他国の人の中にもあったことが分かります。それが、南谿はもちろん凌舎や龍馬の高千穂登山の動機にもつながったように思えるのです。

さて天の逆鉾とは何ぞや、ということについて、南谿いわく、

「むかし、あめつちいまだ、ひらけざりし時、冊諾二柱の御神、天の浮橋の上より、霧の海を詠め下し給ふに、島のごとくに見ゆるもの有。二柱の御神、天のとぼこを以て是を探り見給ふに、国なりければ、則此所に跡を垂たまふ。霧島山と名付ける由来にして、其鉾を逆しまに下し給ひしが、今に到り、其ままにこの山の絶頂に建て有るを天の逆鉾といふ」（冊諾とはイザナギ・イザナミの二神）

これに対して、薩摩藩の学者、白尾国柱は『麑藩名勝考』（寛政七年・一七九五）の中で、出雲の大己貴神（大国主命）が国譲りをした時、天孫ニニギノ命に自分の持っていた鉾を奉った。ニニギノ命はその鉾を携えて高千穂に天降り、山頂に立てて、国内統治と天下平安のシンボルにしたというふうに考証しています。

以上の二つの説を詮索すると、南谿説は『記紀（古事記・日本書紀のこと）』の読み違いがあるように思います。

『古事記』も『日本書紀』も、鉾は天上に引き上げたと書いており、山頂に立てたとは全然言っていません。霧の中に島のごとく見えたものがあったので、鉾で探ってみたら国であった。これが霧島山という由来だと南谿は書いています。

しかし、これも正しいとは思えません。なぜなら、天上から下界（海）に指し下ろした鉾を引上げる時に鉾先から滴った潮が凝り固まって、まずオノコロ島（日本島の母体）ができたと『記紀』は述べています。その後、二神（イザナギ・イザナミ）はオノコロ島に天降り、淡路島や伊予島（四国）、筑紫島（九州）などを生んでいくのです。したがって、二神が下界に鉾を指し下ろした時点では、九州にある高千穂の峰は、まだ存在していないはずです。

一方、白尾氏の説はどうかといえば、『記紀』の神話と矛盾していません。

さて、肝心の疑問点、逆鉾は元はどんな形をしていたかということなどについては後編でお話いたします。

文責＝藤

現在の逆鉾

龍馬が描いた逆鉾